

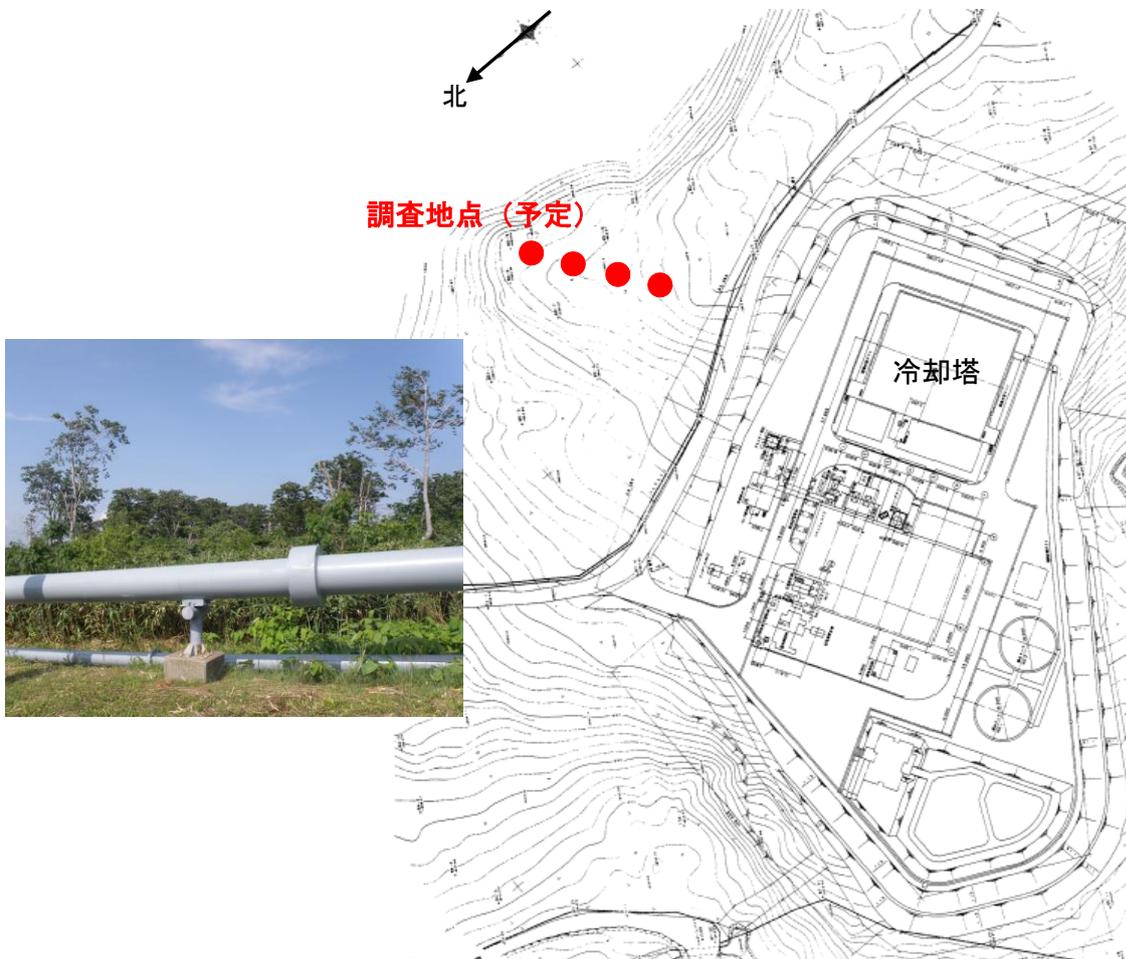
## 国内現地調査・補足調査計画

## 1. 周辺植生に関する現地補足調査の計画

## ■澄川地熱発電所

発電所周辺にてブナ等の立ち枯れが数多く確認され、発電所建設時の樹林伐開に伴う風の影響が示唆された。このため、立ち枯れを含む周辺樹木の健康状態（活力度）の現状を把握するとともに、立ち枯れの時期を推定するために肥大生長量調査を行う。

調査項目	調査方法
樹木活力度調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>環境影響調査書によると年間を通じて最も多い風向は南西の風であり、現地確認においても樹木の形状から見て南寄りの風を受けていると判断されたため、最も風の影響を受けていると考えられる北東側を中心に調査対象木を選定し、林縁部からの距離に従って活力度がどのように変化するかに着目した調査を行う。調査対象はブナを予定する。樹木位置情報はGPSで把握する。</li> <li>各調査対象木について、樹形・樹勢等の樹木全体の様子、枝葉の密度・枯損等の枝葉の生育状況、葉色や葉の大きさ等の葉の生育状況等の目視観察によって樹木個体の生育状況（活力度）を定量的に把握する。</li> </ul>
肥大成長量調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>上記の調査対象木について、成長錐を用いて年輪コアを採取し、コアサンプルを持ち帰って年輪幅を計測し、年輪成長（肥大成長）の経年変化を比較する。</li> <li>上記の樹木活力度のランク区分、発電所施設（冷却塔）や道路からの距離別に、施設建設前から遡って成長量を比較する。</li> </ul>

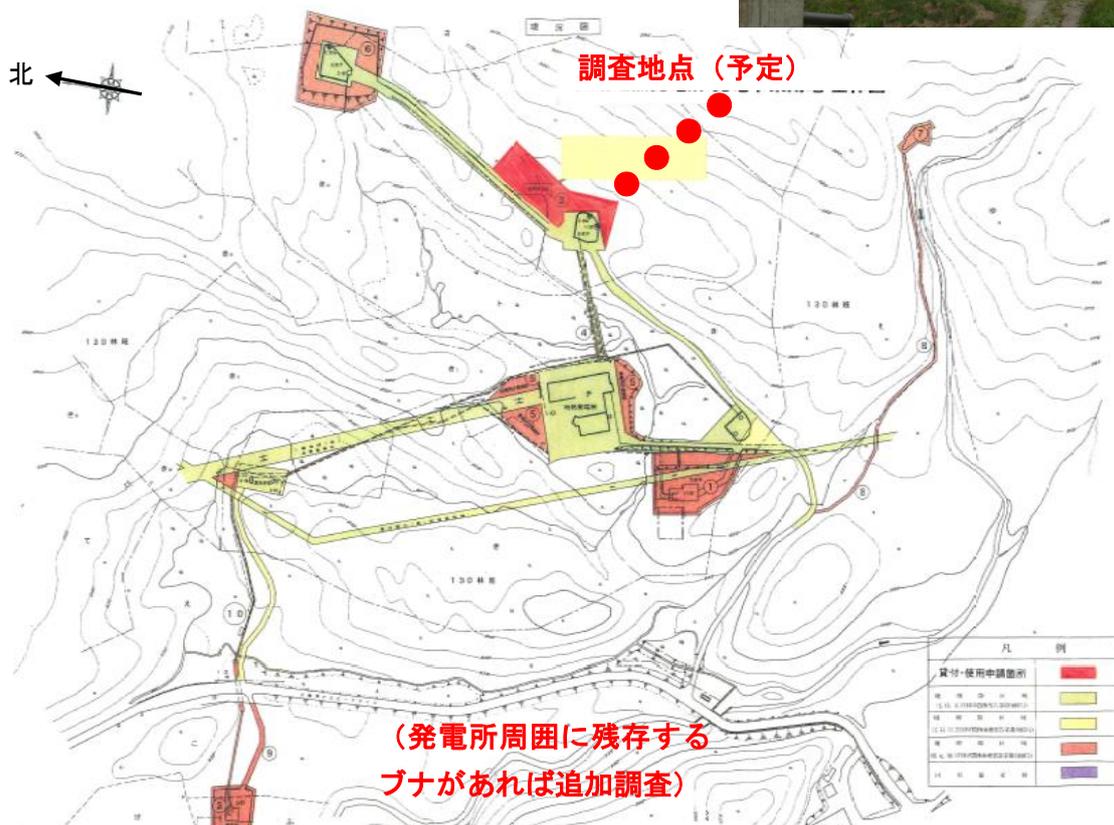


## ■大沼地熱発電所

大沼地熱発電所では、発電所建設時の蒸気噴出試験によって周辺のブナが枯死したほか、ブナ林の伐採およびカラマツ植林が行われ、植生が大きく変化した経緯を有している。調査対象は現在、一部蒸気が開放されている生産井近傍のカラマツを対象として、健康状態（活力度）の現状を把握するとともに、肥大生長量調査を行う。

なお、残存しているブナがあれば調査対象として追加する。

調査項目	調査方法
樹木活力度調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>生産井近傍のカラマツを調査対象木として選定し、林縁部からの距離に従って活力度がどのように変化するかに着目した調査を行う。樹木位置情報はGPSで把握する。発電所近傍に残存したブナがあれば、調査対象木として追加する。</li> <li>各調査対象木について、樹形・樹勢等の樹木全体の様子、枝葉の密度・枯損等の枝葉の生育状況、葉色や葉の大きさ等の葉の生育状況等の目視観察によって樹木個体の生育状況（活力度）を定量的に把握する。</li> </ul>
肥大成長量調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>上記の調査対象木について、成長錐を用いて年輪コアを採取し、コアサンプルを持ち帰って年輪幅を計測し、年輪成長（肥大成長）の経年変化を比較する。</li> <li>上記の樹木活力度のランク区分、発電所施設（生産井）からの距離別に、成長量を比較する。</li> </ul>



### ■山川発電所

山川発電所は、周辺が広大な農地であること、建設に伴う周辺樹木への影響（伐採に伴う微気象の変化や土壌の乾燥）や潮風の影響を直接被るようなことが少なく、周辺植生への影響が想定されないと考えられることから、補足調査は実施しない。

### ■大霧発電所

大霧発電所周辺は、スギ・ヒノキなどの針葉樹人工林や人工牧草地で占められている。発電所西南の隣接林分でヒノキの立枯れが一部で見られるものの、発電所建設時の伐採に伴う微気象の変化などにより一部が損傷したものと考えられ、林の奥まで被害が拡大する恐れがないこと、落葉樹を主体とした様々な樹種からなる樹高 5～6m 前後の林分が既に回復しつつあり、今後植生遷移に伴って常緑樹林に移行していくであろうことが想定される。

このため、発電所建設に伴う風の影響や噴出試験の影響把握は、澄川地熱発電所および大沼地熱発電所にて実施することから、大霧発電所では補足調査を実施しない。

## 2. 景観に関する現地補足調査の計画

各発電所ごとに、国立公園の景観の観点から、主たる眺望地点や公園利用者の多い地点にて景観現況の写真撮影を行う。